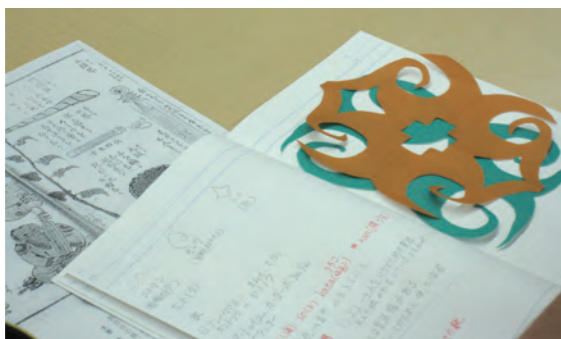




アイヌの歴史や文化について講義する結城幸司氏。

アイヌの歴史や文化について講義する結城幸司氏。その中で生徒たちは、異なる文化の歴史を知ること、当事者の視点で本当のことを理解すること、その歴史に思いやりを持つことの大切さを、具体的に学ぶことができました。そして、北海道という地を古くから知るアイヌの文化を理解することから、精神的なものも含め、現在も厳しい環境である北海道で生きる術に

触れる経験となりました。さらに、高3の国内研修としてアイヌ文化をフィールドワークする「アイヌ研修」を実施。2015年度は、



アイヌ文様は、渦巻きや流水、風、ツルなどをモチーフにしていると言われています。

アイヌの歴史・文化の情報発信拠点である阿寒湖アイヌシアター（ヘイコロ）でのアイヌ古式舞踊鑑賞やアイヌコタン見学、阿寒湖周辺の森の散策やアイヌ文化学習を通してアイヌ文化を体験しました。阿寒アイヌ工芸協同組合理事の秋辺日出男氏の講演では、少数民族として差別や人権無視にさらされた「観光アイヌ」形成の歴史が紹介され、多文化共生について深く考える機会となりました。また、前田一歩園財団理事の新井田利光氏のガイドによる阿寒の森散策では、北海道に残る数少ない原生林を歩きながら、自然保護に関する様々な事業について説明を受け、アイヌの精神でもある「自然との共生」についてフィールドワークすることができました。

立命館慶祥高等学校1Rコースでは、高1・高3と、先住民族であるアイヌについて学んでいきます。

### アイヌ学習の概要

身近な異文化を学ぶことが、グローバルに羽ばたく第一歩！



## 北海道だから見える、多文化共生の未来。

立命館慶祥高等学校1Rコース・アイヌ文化学習

北海道に暮らす人々にとって、近くて遠い存在だったアイヌ民族。立命館慶祥高校1R（インターナショナルリレーションズ）コースでは、この身近な異文化に学ぶことこそ、異なる価値観を持つ人々と対話していく、これからのグローバルリーダーへの第一歩であると考え、アイヌの歴史・文化・価値観を学ぶ学習に取り組んでいます。異文化——多様性を受け入れたとき、生徒はどのように変わるのでしょうか？ その取り組みと、生徒の感想を紹介します。



アイヌの踊りを習う生徒たち。



アイヌ研修の様子。右中央の写真は阿寒湖アイヌシアター<イコロ>



# 「home」を語れることが、国際化の第一歩。

グローバル教育というと、英語教育や海外研修が頭に浮かびます。もちろんそれも大切なのですが、もっと大切なのは自分たちの「home」

について語れることです。立命館慶祥高校の生徒なら、地元北海道のこの「home」を知らなければ、語るものはありません。北海道には先住民族アイヌの長い歴史があり、足元の異文化を理解していくことが、国際化の第一歩になります。

ニューズで聞く話と、実際の現場では違いがある。そういったシチズンシップ教育にもつながっているのではないかと感じています。

IRコースでは、「アイヌ研修」の後、生徒たちはローカルに根ざしたレポートを書きます。自分なりの考えをまとめることで、生徒それぞれがアイヌ研修の意義を問い直すことになりま。さらに、生徒代表が多文化共生の先進都市、カナダのバンクーバーにも研修に行き、「アイヌ文化をどう継承していくのか？」についてプレゼンテーションを行って意見をもらいます。アイヌの人たちの生の声を持って、多文化共生の先進都市に行き、少数民族の文化を尊重する政策を学んでくるのです。

アイヌ研修を終えた生徒たちの多くは、地元を離れ、立命館大学に進学します。そんな中、とてもうれしい知らせを受けました。自然と共生し身の丈に合った生活を望む人生観や、コミュニティの絆など、アイヌ文化に惹かれた立命館慶祥高校の卒業生が、アイヌ文化に造詣の深い本田優子氏の指導を受けながら、「生きた文化」としてのアイヌを、高校生たちにも入ってもらう、考えていきたいと思います。高次連携の新しいかたちかもしれません。

2017年度のアイヌ研修では、彼ら大学生と連携し、平取・二風谷でのワークショップを検討しています。アイヌ文化に造詣の深い本田優子氏の指導を受けながら、「生きた文化」としてのアイヌを、高校生たちにも入ってもらう、考えていきたいと思います。高次連携の新しいかたちかもしれません。

アイヌ研修を終えた生徒たちの多くは、地元を離れ、立命館大学に進学します。そんな中、とてもうれしい知らせを受けました。自然と共生し身の丈に合った生活を望む人生観や、コミュニティの絆など、アイヌ文化に惹かれた立命館慶祥高校の卒業生が、アイヌ文化に造詣の深い本田優子氏の指導を受けながら、「生きた文化」としてのアイヌを、高校生たちにも入ってもらう、考えていきたいと思います。高次連携の新しいかたちかもしれません。

2017年度のアイヌ研修では、彼ら大学生と連携し、平取・二風谷でのワークショップを検討しています。アイヌ文化に造詣の深い本田優子氏の指導を受けながら、「生きた文化」としてのアイヌを、高校生たちにも入ってもらう、考えていきたいと思います。高次連携の新しいかたちかもしれません。



カナダ研修では、スタンレーパークやピースアーチ、プリティッシュコロンビア大学、セントジョーンズスクールなどを訪れました。



## 「イランカラプテ」～利他の心～ アイヌを通して見えてきたもの。



### 意識するアイヌ、 意識されるアイヌ。

アイヌの授業を受けてから、友達と意見を共有したり、課題研究に活かしたり、部活（国際交流部）でお世話になったアイヌの方と連絡を取ったり、楽しみながら学んでいる。私の両親は東北出身であるため、私は北海道に生まれても自分のルーツや親戚は北海道になく、周りの友達を羨ましく思う時があった。しかし、私が北海道に生まれたことに変わりはなく、将来どこに暮らしたとしても私の故郷は北海道だ。アイヌについて学ぶにつれ、北海道に生まれてよかったと思う瞬間が驚くほど増えている。意識すれば、アイヌの作品やアイヌ語の看板が身の回りであることに気が付いた。知れば知るほど北海道が好きになる。知る機会を作ってくれたのもアイヌ、知る手段もアイヌ。土地と人は切り離せない存在だと再認識した。近年、アイヌ文化が、彼らの色と物語を失わずにうまく若者に広まり、互いに依存のない共存に向けて進み始めている。双方が意識し、意識されながら、少しずつ「人」と「この土地」を知っていくことが、ローカルに生きグローバルに学ぶこれからの若者にとって、大切なことだと考える。

清水妙さん

### 観光アイヌの歴史から、 多文化共生の意味を学んだ。

私は、秋辺さんの話を聞くまで、観光に対して良い印象しか持っていなかった。観光という言葉は光つまり、建物や景色、食べ物など、文化を眺めることである。私はこれだけ聞いてもまだ観光については良いイメージしか出てこなかった。しかし、観光アイヌの話聞いた時は、今までは考えたことのないことだったので、とても良い学びになった。まず、人権無視の問題だ。昔、アイヌ民族の女の人は動物園の動物のような扱いを受けていたということを知り、昔のアイヌ民族の人々の扱いが酷かったこと、アイヌ民族が観光に対して抱いていたイメージがとてモラルに伝わってきた。アイヌ民族の女たちは写真を撮られ、体を触られ、人間としての扱いを全くされなかった。また、秋辺さんの友人の話では、アイヌ民族は普通に人間の食事をするものではないと思っていた人もいたそうだ。秋辺さん自身も、熊ばかり食べていたから毛深いのだと言われたこともあるそうだ。このようなことになってしまったのは、多文化共生という考え方がまだなかったからだ。私たちは、このように傷ついた人々がいることをしっかりと理解し、多文化共生について考えていかなければならない。

上西咲絵さん

### アイヌの心を受け継ぎたい 「イランカラプテ」。

今回の学習で私が深く考えさせられたのはアイヌの言葉や精神だ。一番印象に残っている言葉は、「irankarapte（イランカラプテ）」。「あなたの心に触らせてください」という意味を持っている。そもそも、「ものを大切にする」、「ひとつひとつのものには神様が宿っている」そのような考え方を言葉で表すと「irankarapte（イランカラプテ）」なのだという。ひとつひとつのものごと、たくさんの人、ひとりひとり、すべてのことに「irankarapte（イランカラプテ）」の気持ちで接することができれば、それはアイヌの精神を伝承することと同時に、現代を生きる私たちの事も大きく成長させてくれる。アイヌは常に自分以外のものをとても大切に、すべてのものに感謝の気持ちを持ってきた。そんなアイヌの文化を残していかなければならず、それが、今の私たちに足りないものであると実感した。

今野綾香さん

### 新たな文化の誕生は、 お互いを理解し合っていく 過程で起こる。

アイヌ研修で提示された「自文化を保ったまま異文化と共存すべきか」「自文化と多文化のミックスを行っていくべきか」という対立したテーマについて、私は後者に賛成する。なぜなら、様々な文化の融合は避けられず、無理に自文化の独自性を保とうとすれば、新たな軋轢が生まれるのではないかと推測したからである。文化と文化が混ざり合うことによる新たな文化の誕生は、お互いを理解し合っていく過程で起こり得るものであると私は考える。ただしそれは一概に今ある文化の固有性の保存を否定するものではなく、あくまで伝統は伝統として後継していく決意が必要であるし、対等な文化交流のためには自文化に誇りを持つことが不可欠だ。例としては、アイヌの伝統音楽に世界のポピュラーミュージックを取り入れてプロデュースするOKIさんがいる。彼は自文化に誇りを持っているからこそ、双方の良いところを取り入れた新たな音楽を産み出せるのだ。



樺太・アイヌの伝統楽器「トンコリ」奏者のOKI氏が率いる「DUB AINU BAND」。

佐々木悠さん

※アイヌ衣装の写真提供：公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構



江口明子  
立命館慶祥中学校・  
高等学校教諭



カナダ研修でのアイヌ文化継承に関する発表の様子。